

## 『ぎやどべかどる』の文字化について

今 野 真 二

Visually Representing the Language of the Guia Do Pecador

Shinji KONNO

### Abstract

This paper analyzes how Sinographs and kana represent language in the Guia Do Pecador, a Jesuit printing (Kirishitan-ban) text published in Nagasaki in 1599. This is an abridged translation into Japanese of the 1567 Guia de Pecadores written by the Spanish Dominican priest Luis de Granada. One result of this study, for example, is that the Sinograph 明 (“bright”) is consistently used to express the two phonetic sequences akiraka and akira. Throughout the text, the Sinograph 明 represents more than one phonetic string but no more than two; this differentiates it from the orthographical practices of other contemporary texts written in Japan (and, one might assume, written by native speakers of Japanese). It seems that the visual representation of language was not based on a correspondence between Sinograph (e.g., 明) and lexical concept (e.g., “bright”) but on a correspondence between Sinograph and phonetic string (e.g., akiraka and akira). This can be understood as a phonetic-based orthography, a hereto unexplored aspect of the text.

**Keywords:** *visual representation of language, non-vocal, Kanji string*

### 要 旨

本稿では、慶長4（1599）年に長崎で出版されたキリシタン版『ぎやどべかどる』が漢字と仮名とを使って、どのように語を文字化しているかについて検討した。その結果、例えば、漢字「明」であれば、「アキラカ」「アキラ」という音列＝発音をあらわすためにほぼ例外なく使用されていることがわかった。「明」があらわす音列は1つに限定されてはいないけれども、

それが2つに絞られていることは、同時代の国内文献の文字化、すなわち日本語母語話者による文字化とは異なっており、漢字と語との対応をもとに文字化が行なわれているというよりは、漢字と音列との対応をもとに漢字が使用されていると思われ、それを「音声寄りの文字化」とみることができる。こうしたことについてはこれまで指摘されたことがなかったと考える。

**キーワード：**非音声的な文字化・漢字列・連合関係

## 1. はじめに

『ぎやどぺかどる』<sup>1</sup> はスペイン、ドミニコ会修道士 *Fray Luis de Granada* (1505-1588) が著わした *Guia do Pecador* (罪人の導き) を日本語に翻訳したもので、慶長4 (1599) 年に長崎で刊行されている。「退悪修善の道理を集め、信仰を深め、より堅固なものにするための指導書」(尾原 悟 2001: 349p) として「刊行以来、キリシタン時代をとおして、また、迫害時代に入っても長く読まれていたことが知られ、そのためかキリシタン文学中の白眉と称されてきた」(同前) との指摘がある。

論文の題名に含まれる「文字化」は、「語」「文」「文章」「テキスト」を言語単位としてとらえた場合、そうした言語単位が文字によってどのように表わされているかをあらわす概念、用語として使う。

日本語をあらわすための文字として、「仮名」と「漢字」とを使うことができる時期、すなわち仮名がうまれたと考えられている9世紀末頃以降においては、仮名と漢字とをどのように使って「語」や「文」をあらわすか、ということが日本語の「文字化」にあたる。「漢字」を「表語文字」とみるか「表意文字」とみるかについては議論があるが、本稿においては、日本語をあらわすために使われている漢字を「表意文字」とみなし、そのように呼ぶ。「仮名」は「表音文字」とみなし、そう呼ぶ。本稿では、言語単位としてはおもに「語」を観察対象とする。

右のことをふまえて、論文の題名を改めて説明するならば、『ぎやどぺかどる』において、表意文字である漢字と表音文字である仮名とをどのように使って文字化が行なわれているかを考察することが本稿の目的であることになる。

『ぎやどべかどる』に使用されている金属活字は、慶長3年に出版されている『さるばとるむんぢ』・『落葉集』、慶長5（1600）年に出版されている（後期国字本）『どちりなきりしたん』・『おらしよの翻訳』に共通するもので、「その平仮名の特徴から「平仮名第二種本」と呼ばれるグループに属する」ものであることが豊島正之（2001）によって指摘されている。

さらに豊島正之（2001）は「『さるばとるむんぢ』以前は、漢語に必要な漢字（活字）自体が存在しない為に、漢字表記が出来なかった語もある様である。『落葉集』に至って漸く、二、〇〇〇字を超える規模の活字作成に成功し、それによって初めて「ぎやどべかどる」の整版が可能になった。『ぎやどべかどる』と『落葉集』の漢字、及び仮名・欧文・約物も含めると、当時のイエズス会印刷所の活字準備は凡そ二、六〇〇字（異なり）前後と見積もられる」（372頁）「『ぎやどべかどる』とほぼ同時代を例に取れば、『易林本節用集』初版所載の漢字は、今西浩子（二〇〇〇）の認定・索引によれば、四、二四六字である。『元和三年本下学集』（序文・点画小異字除く）に用いられる漢字は約三、一〇〇字であるが、そのうち約五八〇字は当該見出し語のみに用いられる漢字なので、他の見出し語や『地の文』に現われて活用される漢字は、約二、六〇〇字となる。即ち、当時のイエズス会印刷所の漢字活字準備は、易林本節用集には及ばないものの、元和三年本下学集とほぼ同規模の『活用漢字字彙』を既に擁していた事になり、実際にその約七割を利用した組版が『ぎやどべかどる』である」（373頁）と述べ、「『ぎやどべかどる』には、漢字活字が存在しないという理由でやむなく仮名書きされた語は見当たらない。必要な字は全て用意する体勢で臨んだのが『ぎやどべかどる』の印行であり、布教に効果的な漢語使用・漢字表記への要求は、『落葉集』『ぎやどべかどる』に至って初めて満たされる事となった。（『落葉集』は字書であるから）、『ぎやどべかどる』は、現存キリシタン版中、テキストとしては初めて十分な漢字・漢語表現を獲得した版本であると云う事が出来る。『ぎやどべかどる』が、キリシタン版の精華・白眉と称され来ったのは、まことに故無しとしないのである」（376頁）と述べている。

本稿では、こうした豊島正之（2001）の指摘に基づいて、『ぎやどべかどる』は活字印刷されているけれども、「やむなく仮名書きされた語は」存在しない、つまり『ぎやどべかどる』の文字化のしかたは、『ぎやどべかどる』

編纂者の意図どおりであるという前提を設けることにする。

## 2. 「送り仮名」というとらえかた

柴田雅生 (2013) の「おわりに」には「本稿は『ぎや・ど・ぺかどる』における送り仮名の特徴の摘記に終始した」とある。また「はじめに」においては、昭和 48 (1973) 年 6 月 18 日に内閣告示第 2 号として示され、昭和 56 (1981) 年 10 月 1 日に内閣告示第 1 号として示された「常用漢字表」にともなって同日の内閣告示第 3 号によって一部改正された「送り仮名の付け方」がまず話題として採りあげられている。さらに「2 送り仮名分析の視点」においては「送り仮名の付け方」の「本文」の見方及び使い方を掲げ、「ここには送り仮名法をいかにして記述するかの基本が示されているとあってよいと考える」、「汎時論的な分析の視点として有効であろう」と述べ、「3 用言の送り仮名」以下では、この、現代日本語を対象にしてつくられた「送り仮名の付け方」を基本的な枠組みとして、『ぎやどぺかどる』の「送り仮名」についての観察が行なわれている。そして次のような言説がみられる。傍線は稿者が施した。

- a 「給 (タマフ・タマハル)」に関しては、活用語尾の一部を施さないという若干の例外も見られ、タマハルの未然形においては*はいわゆる不変化語尾*を送るが、タマフとタマハルの区別は明瞭である。
- b 送り仮名を施さない「逢」が、未然形 (逢ざる) にも連用形 (逢て) にも、さらには終止形 (逢べき) にも対応するが、下接の語により語形は判別可能である。ところが、次に示すように同一の語に対する送り仮名の*異表記*が併存している。

a の「例外」は昭和 56 (1981) 年に一部改正されて内閣告示された「送り仮名の付け方」が通則 1 の本則において、「活用のある語 (通則 2 を適用する語を除く.) は、活用語尾を送る」としていることを『ぎやどぺかどる』にあてはめた場合の「例外」ということであろう。改めていうまでもないけれども、『ぎやどぺかどる』出版時に、『ぎやどぺかどる』の印刷出版にかかわった人々に、現代日本語についていうところの「活用」「活用語尾」「不変化語尾」という概念があったことは証明されていない。むしろそうし

た概念はなかったとみるのが自然であろう。そうであれば、柴田雅生（2013）の観察、分析は、現代日本語をもとにしてつくられた「枠組み」を現代日本語から400年ほど前の日本語にあてはめたものということになる。

aにおいては単に「区別は明瞭である」と述べられ、bにおいては「下接の語により語形は判別可能である」と述べられている。文中にある語に関しては、当該語の前にも語があり、当該語に続く語があることが一般的で、その中で一つ一つの語の同定をはじめとしたあらゆる判断が行なわれる。観察対象としている語の前後にも語があり、具体的な文中で語に関する判断が行なわれることを、今ここではごく簡略に「文脈による判断」と呼ぶことにする。「文を理解する」という行為の中で語の同定が行なわれるとみるならば、「文脈による判断」は、読み手が意識するしないにかかわらず、つねに、そして上位の判断として機能しているとみるべきではないだろうか。『ぎやどぺかどる』というテキストから、現代日本語を対象とする言語学である日本語学が認めている「語」を抽出し、その「語」を単位として観察、分析を行なうことは「常道」ではあろうが、観察対象としている日本語、観察対象としているテキストに合わせて、「常道」の「微調整」はつねに必要であろう。語を単位とした観察で説明がつかない場合には、「下接の語」による判断をする、とみるのであれば、「総合的な表記システム」の中に優先順位をもった幾つかの「サブシステム」があることになるが、柴田雅生（2013）がそうした「みかた」を採っていることは明言されていない。

柴田雅生（2013）は「『ぎや・ど・ぺかどる』の送り仮名—キリシタン版の送り仮名使用の一端—」という題名の論文であるが、その「おわりに」の直前で「このように見てくると、統一的な送り仮名法を志向すると見てとれる反面で、多くの語において少しずつ異なる表記形式を伴うのが、『ぎや・ど・ぺかどる』の送り仮名の実態であると考えられる。何故わずかながらの例外が存在するのか。この点を明らかにすることが肝要であり、送り仮名の変遷に関しても示唆を与えるだろうと考える」と述べている。

しかし『ぎやどぺかどる』が「志向」した「統一的な送り仮名法」が具体的にどのようなものであるかは論文内に示されていない。論述からすれば、あるいは昭和56年に内閣告示されている「送り仮名の付け方」が『ぎやどぺかどる』が志向した「統一的な送り仮名法」ということになりそうであるが、はたしてそのような「みかた」が成り立つであろうか。そして

また柴田雅生(2013)は自身の基準によって例外とみなした例＝「例外」が存在することについてその存在を疑問視している。それは、「自身の基準」が絶対のものであるから、その基準にそぐわない「例外」があることを疑問視しているようにもみえるが、「自身の基準」以外の基準＝「表記システム」を背景にした文字化であるという可能性を探る必要は当然あると考えられ、この疑問視は疑問視すること自体が「ロジック」として理解しにくい。

原田裕(1989)は『ぎやどべかどる』の「上巻第一篇」を観察対象として、「送り仮名は統一的で、よく送られていると見るべきであろう。読者に対する十分な配慮が丁寧な表記となり、送り仮名もまた過不足なく統一したものになっていくという表記の歴史の趨勢を、実例をもって示したものになっているのである」と述べている。『ぎやどべかどる』についての記述は24行で、うち17行は『ぎやどべかどる』の引用で、具体的にどのような事象に基づいて、「統一的で、よく送られている」という判断が行なわれているかについて、論文読者は知ることができない。上記記述は「ぞんざいな表記と丁寧な表記」という節中にあるが、「ぞんざいな表記」「丁寧な表記」は定義されていない。そのことからすれば、「統一的で、よく送られている」という「みかた」は現代日本語母語話者の「印象」を述べたものに限りなく近いのではないだろうか。

現代日本語を対象としてつくられている「送り仮名の付け方」を「スケール」として過去の日本語について述べることは、現代日本語母語話者にはわかりやすい一方で、過去の日本語のありかたに添った「表記システム」の考究にはならない懸念がある。

さらにいうならば、「送り仮名」という「みかた」そのものが現代日本語母語話者のとらえかたであり、まずは「送り仮名」という「みかた」からいったんにしても離れる必要があると考える。

### 3. 文字化というとらえかた

『ぎやどべかどる』においては「カキタマフ」<sup>2</sup>が次のように文字化されている。「／」は改行位置を示す。「上27裏7」は当該例が『ぎやどべかどる』上巻27丁裏の7行目にあることを示す。後に観察対象に加える「カキオク」「カキツクス」「カキハジム」の使用例も併せて示しておくことにす

る。

- 1 御憲法の上より差捨て給ふと書き給ふ也（上 27 裏 7）
- 2 \*さんまてうすの書給ふ御主の御辞に（上 35 裏 11）
- 3 尚限りなく恐ろしきは\*さんまてうす／書給ふ御主の御辞に（上 36 表 15）
- 4 \*さんまてうす／書給ふごとく（上 38 表 1）
- 5 \*さんるうかすのあつたあぼすとらうるんと／いふ経に書給ふ事に比べては更に驚く にとらず（上 40 裏 13）
- 6 \*さんげれごうりよのぢあろごといふ記録に書給ふ／事をきけ（上 49 表 9）
- 7 行ひ目出たかりしと書給ふ者也（上 49 裏 3）
- 8 \*さんとあんぼうろじよ或書にかき給ふは（上 66 表 11）
- 9 \*さんとあぐすちいよ御身の／上を懺悔して書給ふは（上 88 裏 1）
- 10 是に付て／ゑうぜびよゑみせの書給ふは（上 103 表 9）
- 11 \*さんとしびりあの書給ふ也（下 22 裏 12）
- 12 \*さんげれごうりよ右の勧めに付て或書籍に書給ふ事をきけ（下 41 裏 7）
- 13 其篇の終りまで多くの／事を書給ふ者也（下 68 表 11）
- 14 昔の未来記に書置かれしに違はず（下 12 表 13）
- 15 \*ゑうぜびよの書置給ひて／だまぞのびすぽへ遣し給ふ（下 9 表 9）
- 16 じよあんきりまこある道心者の上を書をき給ふ事も（上 32 裏 10）
- 17 \*さんと／あぐすちいよ御身の上を書置給ふ事をきけ（下 2 裏 8）
- 18 我等が鏡を顕し書置給ふ事をきけ（下 22 表 6）
- 19 \*さんとあぐすちいよの書置給ふ法度あり（下 60 裏 15）
- 20 善人達の書置給ふ右条々の道理は（下 13 裏 4）
- 21 この直に見給ひたる事を書をき給ふを聞け（上 29 裏 15）
- 22 \*ゑすこうとゝいふ孝匠の書をきたる事をきけ（下 10 表 3）
- 23 御一善をも書盡す／べからずと（上 4 裏 10）
- 24 只其ゑをかき初めたる絵師を頼むべし（上 11 裏 1）
- 25 書初められたるゑのごとく未たんぬとする／事なく（上 11 裏 3）

「カキタマフ」をどのように文字化するかと考えた場合、次のような文字化のしかたが考えられる。

- a : すべてを表音文字である仮名によって文字化する……かきたまふ
- b : すべてを表意文字である漢字によって文字化する……書給
- c : 漢字と仮名によって文字化する……書き給ふ・書給ふ・かき給ふ

c には実際に『ぎやどぺかどる』にみられる「書き給ふ」「書給ふ」「かき給ふ」をあげたが、原理上は「かき・書き・書」と「たまふ・給ふ・給」との組み合わせである九種類の文字化が可能なので、上記 a b c に掲げた例以外に「かき給」「書きたまふ」「書たまふ」「書き給」もあり得ることになる。「カキタマフ」についていえば、可能性のある 9 種類の文字化のうちの 3 種類が実際に使われていることになる。

「送り仮名」という「みかた」は「漢字に仮名を送る」という「みかた」に基づいている。しかし、日本語においては漢字と仮名とを使って文字化しているので、必ず漢字と仮名とを使わなければならないということではなく、漢字のみを使った文字化も、仮名のみを使った文字化もつねに可能であるとみておく必要がある。「送り仮名」が漢字と仮名の併用を前提としている以上、「送り仮名」というとらえかたは、文字化の中の「漢字と仮名の併用」ということがらにはじめから焦点を絞った観察、考察であることになり、きわめて限定的な観察、考察であることになる。

『ぎやどぺかどる』が「カキタマフ」を上記 1~13 のように文字化していることから、「書給ふ」という文字化が 11 回みられると述べることはいわば「事実」を述べていることになる。「書き給ふ」「かき給ふ」がそれぞれ 1 回であることから「書給ふ」が標準的な文字化であるとみることも自然であろう。しかし「カキタマフ」の文字化を「統一的」とみることができるだろうか。「書き給ふ」「かき給ふ」があることをもって、統一的ではない、とみることができるのではないか。というよりも、統一的ではない、とみるべきではないか。

「文字化」の要諦は、文字化されている語がいかなる語かが「読み手」にわかるように文字化することとまずは考えられるが、「いかなる語」がつねに「当該語の語形＝発音がわかる」ということではない。今野真二 (2023) において述べたが、日本語においては、漢字列<sup>3</sup>が「非音声的に、連合関係



を形成している」(37頁)<sup>4</sup>と思われ、そのことからすると、語形＝音声形を特定せずに意味喚起をするような文字化があると考えることができる。

今野真二(1995)において『落葉集』について「漢字の音訓を峻別し、音引きと訓引きとを別個に組織している『落葉集』においては、いわば「音声中心主義」をその軸の一つとしている」(328頁)と述べた。これは『落葉集』に関してのことであるが、『落葉集』と同じ年に、同じ金属活字を使って印刷されている『ぎやどべかどる』も同様な「心性」のもとに編集されていると推測する。

『ぎやどべかどる』の上巻末には「ぎやどべかどるの集字」、下巻末には「ぎやどべかどるの字集」が置かれている。上下巻末にある「集字・字集」について土井忠生(1971)は「国字本である「ぎやどべかどる」は上下二巻二冊から成り、それぞれに巻中の漢字を集めてその読み方を示した集字(上巻)、字集(下巻)が巻末に添へてある。その形式は、部首によつて分類した点が(引用者補：『落葉集』の)小玉篇と似て居り、部首下の漢字は一字のものと二字以上のものとを分け、同字また同訓のものを並べる点が(引用者補：『落葉集』の)色葉字集と同じである。ところで、部首の出し方が上下両巻の間で相違してゐる」(144-145頁)と述べ、「「ぎやどべかどる」上巻の集字編修の段階において、色葉字集は参考されたであらうが、小玉篇は利用されなかつたのであり、下巻の字集編修に及んで、小玉篇が全面的に活用されたと考へられる」(145頁)と述べ、さらに「一五九八年の刊記を有する小玉篇は遅くとも同年の内に印刷を終つたのであつて、「ぎやどべかどる」下巻字集の編者は、その版本に拠つたので、十分にそれを利用し得たのだと推測される」(146頁)と述べている。したがって、『落葉集』と『ぎやどべかどる』とに共通する「心性」があることを想定することは不自然なことではないといえよう。そうであれば、『ぎやどべかどる』の文字化はやはり「当該語の語形＝発音がわかる」ということを要諦としていてみてよいことになる。

「書」について「集字・字集」には「書(右振仮名かく)しよ」(上集字8表10行目・下字集10裏6行目)、「書(右振仮名しよ)かく」(下1表2行目)とある。漢字「書」の音は「ショ」、和訓は「カク」という認識が明確に示されている。ただし、「書置(右振仮名かきをく)」(下字集11表7行目)「書置(右振仮名かきをき)」(上集字10裏8行目)もある。

漢字列「書置」が「かきをく」すなわち「カキオク」、「かきをき」すなわち「カキオキ」と対応しているのであれば、「書」は「カキ」にも、「置」は「オキ」にも対応していることになる。このことを考え併せるならば、「書」は「カク・カキ」に、「置」は「オク・オキ」に対応していることになる。和語動詞「カク」「オク」は4段活用をする動詞であるので、「カキ・カク」「オキ・オク」はそれぞれの動詞の連用形、終止形、連体形ということになり、未然形、已然形以外の活用形に対応することになる。そのように考えた場合、1の「書き給ふ」における漢字「書」は「カ」のみと対応していることになり、「例外」ということをいうのであれば、これがむしろ「例外」ということになるだろう。

#### 4. 『ぎやどべかどる』の文字化 — 「アキラカナリ」を例として—

『ぎやどべかどる』において、「アキラカナリ」がどのように文字化されているか、幾つかの例をあげてみることにする。

- 26 色身の自由を偽りとする事明也（上 83 表 14）
- 27 惣て大切は萬事に勝事明也（下 20 表 12）
- 28 又人のおんたあでを遂給ふ道理明也（上 96 裏 14）
- 29 御返報を与へ給ふといふ事明なり（下 43 裏 15）
- 30 らさよりなし給ふ善の道なる事明なりと（下 22 裏 11）
- 31 溺れぬ所作をなし悦びとする事明なり（上 88 表 1）
- 32 是を\*さんぱうろ明に顯し給ひて（上 87 表 5）
- 33 今まさに智恵明にしていふ（上 55 表 2）
- 34 尚其徳を明に弁へんが為に則勤め行ふべき道を（下 62 表 13）
- 35 辛勞艱難に其差別ありといふ事明かなり（上 101 表 6）
- 36 こんしゑんしやの明かなる光を以てあにまを照し（上 77 裏 4）
- 37 右の道理明かにして善にこえたる事なければ（下 2 裏 6）

「アキラカナリ」という音列のどの部分を漢字によって文字化し、どの部分を仮名によって文字化するかということからいえば、26-28 はすべて漢字によって文字化し、29-34 は「アキラカ」の部分を漢字によって文字化し、35-37 は「アキラ」の部分を漢字によって文字化している。26-28 は「アキ

ラカ」の部分に漢字「明」で、「ナリ」の部分に漢字「也」で文字化しているので、漢字「明」の側からみれば、漢字「明」は「アキラカ」「アキラ」の文字化に使われていることが確認できる<sup>5</sup>。

マ行下二段活用をする動詞「アキラム」は次のように文字化されている。

- 38 人の歎となる迷ひを何として明むべきぞとならば（上 51 裏 16）
- 39 善の道を後と延る族多きが故に先此迷ひを明むべし（下 2 裏 5）
- 40 別して智恵の眼を明むる事肝要也（下 33 表 5）
- 41 道理を明むる／為には多くの人の存分を聞く事よしといへども（下 66 裏 10）
- 42 孝智といふは是非を糺し明むる智恵也（上 65 裏 1）
- 43 夫遙かの風波を凌ぎ今日域に至て多くの人の迷ひを明らめ（上 1 表 2）
- 44 去ば世界の孝問にては分別をのみ明め（上 65 表 11）
- 45 それといふは分別を明め、おんたあでを燃立せ（上 63 表 10）
- 46 信心を励すべき／分別を明め（上 64 表 2）
- 47 あにまの精力に分れて分別を明めおんたあでを悦ばせ（上 69 裏 11）
- 48 是事に依て明め安く事に依ては明め／難き事あり（下 65 表 6）
- 49 心の闇に迷ひ是非を明めず御掟を保たずして（上 66 表 16）
- 50 分別智を明め給ひ息災延命の幸を与へ給ふと（上 57 裏 4）
- 51 天の光明智恵の眼を／照し迷ひを明め給ふべければ（上 54 表 10）
- 52 科の闇に迷ひたる分別をも明め給ふ者也（上 63 裏 10）
- 53 一人の迷ひを明め給ふをもて諸人を導びき／給ふ者（下 29 裏 1）
- 54 それを明め給はん事御憲法の道なれば（上 13 表 1）
- 55 新しき智恵を／明め強きひいのです持事也（上 88 表 13）
- 56 疑ひの網を破り闇を明らめ塞がりたるを開き（下 22 裏 3）
- 57 疑はしき事ある時是非を明めよき／方を撰びとる智恵也（上 64 表 8）
- 58 御返報現在になしと思ふ迷ひの心を明めよ（上 55 裏 3）
- 59 人の口に任せずして我身を糺し明めよ（下 35 表 15）
- 60 迷ひの甚深き事を／明めんが為に今一つの道理をきけ（下 28 裏 3）
- 61 又此無事の根元を明めんとせば（上 93 表 3）

38-61 は「ぎやどべかどる」において使われている「アキラム」のすべ

ての例であるが、56「明らめ」において漢字「明」が音列「アキ」に対応している他は、すべて音列「アキラ」に対応している。

「アキラカナリ」(26-37)「アキラム」(38-61)を併せみるならば、これらの文字化において、56を除けば、漢字「明」は「アキラカ」「アキラ」にあてられていることになる。上巻末「集字」(1表2)においては、「明」字の右振仮名の位置に「あきらむ」、字下に「あきらか」とあり、再版本下巻末「字集」(10表6)においては、「明」字の右振仮名の位置に「あきらか」とある。「集字」の「あきらむ」「あきらか」、「字集」の「あきらか」を和訓、いうなれば「語」とみるならば、「ぎやどべかどる」においては、「アキラカ」「アキラム」の文字化に「明」を使うということが「デフォルト」として標準設定されていることになる。

『落葉集』『色葉字集』は右振仮名から漢字を検索するようになっているが、漢字「明」の右振仮名は「あきらか」で字下に「あくる」とある。その一方で、「察」字の右振仮名にも「あきらか」(字下みる・あらはす)とあり、「映」字の右振仮名にも「あきらか」(字下うつろふ)とある。このことからすれば、「色葉字集」は「アキラカ」を文字化する可能性がある漢字として「明」「察」「映」3字を認めていることになる。

豊島正之(2001)は「「字集」に現われる約二、六〇〇語の殆どは「ぎやどべかどる」本篇に現われ、(本篇に見出せない語は僅かに五四語)、一方、本篇中の漢字語彙約三、四〇〇語の八割方は「字集」に掲載されているので、「字集」は「ぎやどべかどる」本篇に則した精選字書と呼ぶべく、性格は「落葉集」より著しく特化している」(374頁)と述べているが、上記のことも「特化」を窺わせる。

1例を除いて、漢字「明」が音列「アキラカ」「アキラ」と対応していることからすれば、文字列中の「明」字は「明珠(メイジュ)」「明白(メイハク)」のような2字漢字列で文字化されている漢語を除けば、「アキラカ」あるいは「アキラ」と発音すればよいことになり、そのように考えると、「アキラカ」「アキラ」は「明」字の発音、いうなれば「ヨミ」であることになる。そう考えると、単漢字=1字漢字列による文字化と2字漢字列による文字化とは、いわば「カテゴリー」を異にするとみることができる<sup>6</sup>。

亀井孝(1957)は『古事記』、すなわち漢字のみによって文字化されてい

るテキストを観察対象として、「ある文脈における字を、順次、クンに還元しながら、この文脈全体を日本語の表現として理解してゆかうとすることが、よむである。すなわち、(字を) ヨムは、かかる表現の理解のために一定の文字を一定のクンに還元してゆくことである」(29 頁)と述べている。(もともとの傍点をここでは下線に置き換えた)「ある文脈における字」「(字を)」の「字」は『古事記』を観察対象としているので「字」と表現されているが、漢字を指す。そしてこの引用に先立つ箇所においては「いはゆる《漢字の和訓》とは、このクンのことである」(19 頁)と述べている。したがって、ここでの「ヨム」は漢字と和訓とを結びつけて、特定された語としてとらえること、「よむ」は「ある文脈における字」をその「文脈全体」の中で「日本語の表現として理解してゆかうとすること」、すなわち文意の中で語義をとらえることを意味していると思われる。亀井孝(1957)の「よむ」は語を特定することを前提としていない。

尾山慎(2021)は「ヨム／よむ」という自身の使う用語について、亀井孝(1957)「に倣うもの」(15 頁)と述べ、「ヨムは一言一句語形まで復元するもの、「よむ」は必ずしも、そうでなくても、意味を理解するに及んだ場合を指す」(同前)と述べた上で、たとえば「入／切」のスイッチの表示の「切」は、キルなのか、キレなのか、キリなのか、はては off なのか、定まらない(ヨメない)が意味はわかる(よめる)というものを指す」(同前)と述べている。亀井孝(1957)の「ヨム」は漢字と和訓とを結びつける＝「一定のクンに還元してゆく」ということに限定されていると推測するが、尾山慎(2021)は「はては off なのか」と述べており、和訓に限定せず、漢字をどのように発音するか、というところまで概念が拡張されていると思われる。本稿では、尾山慎(2021)同様、語形＝発音形が特定されれば「ヨメた」、特定はされないが意味はわかったのであれば「よめた」ととらえることにする。

日本語の文字化にあたって、漢字を表意的に使いながら、語形＝発音形が特定できればよい。常用漢字表はひとまずはそうした「状態」すなわち「唯一性表記システム」<sup>7</sup>を志向しているといえるだろう。しかし、漢字の表意使用は、何らかの「制限」がなければ、語形＝発音形が特定しにくいという状況を含むことになる。振仮名を使って、当該漢字列があらわしている語形＝発音形を明示することは、漢字を表意使用しながら語形＝発音形

を確実に示す「サブシステム」といってよいだろう。しかし、振仮名を使用せずに、漢字を表意的に使用すれば、よめるがヨメないという状況がおり得る。巨視的にみれば、日本語の文字化はずっとそれを許容してきた、というよりもずっとそうであった、といえるのではないか。このことについてはさらに考えていきたい。

語形＝発音形を特定しない文字化を一方に置いた時、漢字「明」が「アキラカ」「アキラ」いずれかの音列をあらわしているのであれば、語形＝発音形はきわめて特定しやすいことになる。これを「音声中心主義」という「サブシステム」とみたいが、そうした意味合いにおいて、「ぎやどべかどる」は日本語母語話者による日本語の文字化と、はっきりと異なるシステムのもとに文字化が行なわれていると推測する。

## 5. おわりに

本稿は「ぎやどべかどる」が日本語をどのように文字化しているかについて考えるために、幾つかの例を使った。その結果として、例えば漢字「明」であれば「アキラカ」「アキラ」いずれかの音列をあらわしていることがわかった。「アキラカ」「アキラ」二つの候補があるにしても、「明」字はそのどちらかと結びついているのであり、漢字とそれによって文字化されている語とが1対1で結びついているのではないが、「ヨミ」を推測しやすい表記システムといってよい。

「ぎやどべかどる」においては、〈あっけない〉という語義をもつ「ハカナシ」が31回使われているが、「かゝるはかなき人間の行跡に對して」（上35裏3）を除いた30回すべてが「墓な～」と文字化されている。「墓なし」を「ハカナシ」と結びつけるためには、「墓」が「ハカ」と結びついていることが前提となる。「ハカナシ」の〈あっけない〉という語義と、英語「toom」にあたる語義をもつ和語「ハカ」とには語義の重なり合いがない。したがって、この文字化においては、漢字字義が捨象されていることになる。この場合の「墓」は『万葉集』研究においていうところの「訓仮名」と重なる。「墓」が音列「ハカ」と強く結びついていることを背景にして「墓」を表音的に使って文字化していることになる。12世紀半ば頃に成ったと考えられている3巻本『色葉字類抄』のハ篇「暁字」部に「无墓 ハカナシ」とあり、正宗文庫本『節用集』ハ部言語進退門に「無（右振仮名

ナク)「墓(右振仮名ハカ)」とあることを初めとして、古本『節用集』において、「無墓」と「ハカナシ」との結びつきを確認することができる。こうしたことからすれば、「ハカナシ」を「墓なし」と文字化することの淵源は日本語母語話者がつくったテキスト(国内文献)にあり、それがキリシタン版である「ぎやどべかどる」にいわば「流れ込んでいる」と推測するのが自然であろう。今野真二(1995)において『落葉集』の仮名文字遣は国内資料にみえる仮名文字遣との一致を見せながら、濁点半濁点の積極的な使用を背景にして、音韻中心の、より整然とした体系を構成しているといえる(331頁)と述べた。漢字と仮名によって印刷されている国字本のキリシタン版が同時期の国内文献と隔絶した文字化を行なっていることは考えにくいのであって、国内文献に淵源をもつ文字化と、そうではない文字化とを、程度や「条件」などを見渡しにいれながらキリシタン版における文字化の「腑分け」していくことが今後の課題になると考える。

## 註

- 1 『ぎやどべかどる』として、具体的には、天理図書館善本叢書<sub>和書</sub>之部第38巻『きりしたん版集1』(1976年、八木書店)を使用した。『ぎやどべかどる』上巻は天理図書館蔵本、下巻はイエズス会本部蔵本を底本としている。天理図書館蔵本の上巻、イエズス会本部蔵本は、字集を増補した再版本とみなされている。また、語の検索などのために、豊島正之編『キリシタン版ぎやどべかどる 本文・索引』(一九八七年、清文堂出版)を使った。この索引がなければ、正確な全体把握はできない。学恩に感謝申し上げたい。
- 2 「カキタマフ」のように、片仮名を一重鉤括弧でくくったものは、文字化されていない語＝発音形をあらわす。『ぎやどべかどる』には「二たびなをさるまじき事を深く／恐れ給ふ者也\*さんげれごうりよ書給へり」(上33裏16)というくだりがある。この「書給へ」は動詞「カク」に補助動詞「タマフ」が下接した「カキタマフ」の已然形「カキタマへ」を文字化したものとみるのが、一定の「文法教育」を経た現代日本語母語話者にとっては一般的であろうが、「カキタマフ」と発音する語を文字化したものではない。「書給へり」と文字化されている文字列の「書給へ」の部分が「カキタマフ」であるとみるのは、それが「カキタマフ」の已然形であるとみる「みかた」であって、そうした「みかた」に従って事象を整理することがふさわしいかどうかについては一定の検証が必要になる

と考えるので、今ここでは「カキタマフ」を文字化した例には含めていない。

- 3 並んでいる漢字を「漢字列」と呼ぶ。漢字列が対応している言語単位は「語」であることも、「語」を超えた「文」であることもある。「漢字列」に倣って、並んでいる仮名を「仮名文字列」、並んでいる文字を「文字列」、並んでいる音を「音列」と呼ぶことにする。
- 4 今野真二（2011）において「ある語と何らかの連想によって想起される別の語とは」「連合関係」を形成する」（14 頁）と述べ、さらにある語Xとある語Yとの間において「発音と語義双方に共通性がある場合、語義のみに共通性がある場合、発音のみに共通性がある場合、をひとまずは中核とし、それ以外に、何らかの連想によって想起される場合、をも含めて、「連合関係」という概念をとらえることにする」（14 頁）と述べたが、本稿でもこうしたとらえかたに従う。上記の「それ以外」が漢字列に基づく連合関係ということになる。
- 5 ちなみに、ということでは、常用漢字表は漢字「明」に「あかり」「あかるい」「あかるむ」「あからむ」「あきらか」「あける」「あく」「あくる」「あかす」と九つの和訓を認め、それぞれの「例」として「明かり」「明るい」「明るむ」「明らか」「明らかだ」「明ける」「明く」「明くる日」「明かす」を示す。漢字「明」がどのような音列と対応しているかといえば、「ア」「アカ」「アキ」3種類の音列と対応しており、音列との対応は「絞られていない」ようにみえる。そのことからすれば、常用漢字表における漢字は「音声中心主義」を採っていないことが窺われる。常用漢字表が漢字の表、すなわち文字側から設計された表としてつくられていることからすれば、「音訓」は当該漢字についての音訓で、「例」欄には、当該漢字を使って文字化する「例」があげられることになる。「明」字に認められている訓は上記のように、九種類ある。「アカリ」「アカルイ」「アカルム」「アカラム」「アキラカ」「アケル」「アク」「アクル」「アカス」は語としてみれば、別語ということになる。その九つの別語が、漢字「明」を使って文字化することができるといって、すなわち「明」がこれらの語の文字化に共通して使われるということをもって、このようないわば類聚形式が成り立っている。こうした文字を起点とした表がつけられ、それが日本語の文字化において相応の位置を占めていることには注目しておきたい。この類聚も、非音声的なものといえよう。
- 6 『色葉字類抄』においては2字漢字列が「暈字」として掲げられ、2字漢字列以上のものは「長暈字」として区別されている。古本『節用集』は単漢字=1字漢字列を見出しにする箇所と2字漢字列を見出しにする箇所がほぼ分かれている。



- 7 屋名池誠 (2011) は表記と語形とが「一対一」で対応している表記システムを「唯一性表記システム」と呼ぶ。

## 参考文献

- 今西浩子 2000 『易林本節用集漢字索引』(和泉書院)
- 尾原 悟 2001 ギヤドベカドる解題(教文館, キリシタン研究第38輯〈キリシタン文学双書〉『ギヤドベカドる』所収)
- 尾山 慎 2021 『上代日本語表記論の構想』(花鳥社)
- 亀井 孝 1957 古事記はよめるか(『古事記大成』言語文字篇所収, 後1985年, 吉川弘文館『亀井孝論文集4』再収, 引用は後者による)
- 今野真二 1995 仮名文字遣からみた『落葉集』—「は」「わ」の場合—(『国文学研究』第115集, 後2001年, 清文堂『仮名表記論攷』所収, 引用は後者による)
- 2011 日本語学講座第4巻『連合関係』(清文堂)
- 2023 日本語における漢字列(日本言語学会『言語研究』164)
- 柴田雅生 2013 『ギヤ・ド・ベカドる』の送り仮名—キリシタン版の送り仮名使用の一端—(『明星大学研究紀要[人文学部・日本文化学科]』第21号)
- 土井忠生 1971 『吉利支丹語学の研究新版』(三省堂)
- 豊島正之 2001 ギヤドベカドる解説(教文館, キリシタン研究第38輯〈キリシタン文学双書〉『ギヤドベカドる』所収)
- 原田 裕 1989 近代の送り仮名(明治書院漢字講座4『漢字と仮名』所収)
- 屋名池誠 2011 「近世通行仮名表記」—「濫れた表記の冤を雪ぐ」(笠間書院『近世語研究のパースペクティブ—言語文化をどう捉えるか』所収)